

# 大学における「導入教育」のこれからの必要なこと

## —「アカデミック・スキルズ」の授業実践から—

小川文子

### はじめに

昨今、多くの大学において「導入教育」「初年次教育」「アカデミック・スキルズ」といった呼称の講義が設置されている<sup>1)</sup>。これらは、高校までで明確に習うことはないが大学に入るとすぐにでも必要とされるスキルを学ぶための授業である。藤田（2006）によれば、「導入教育／初年次教育とは新入生へのオリエンテーションとして、高校から大学への学習環境への移行をうながすものである」と定義されている<sup>2)</sup>。例えば、レポートの書き方や文献の検索の仕方、プレゼンテーションの仕方などを学ぶものである。実際、大学1年目が開始して間もない時期から、レポートが課され、にもかかわらず Word の使い方もわからなければ、OPAC の使い方もわからず、課題をこなすことが困難な学生が散見される。また、それ以前に、

---

1) 「導入教育」という言葉は、アメリカの Freshman Seminar (First Year Seminar) の和訳として山田礼子が取り入れたものである。その後、工学や医学・歯学・薬学などの国家試験を念頭にした教育内容を有する分野で段階設定が行われる中、「初年次教育」という用語が交差するようになった。Cf. 濱名篤「大学生にとっての円滑な移行」『大学教育学会誌』、26、37-43、日本大学教育学会、2004年。「アカデミック・スキルズ」は特に、大学で必要となるライティングやリーディングなどの学習スキルに特化した授業内容を示すことが一般である。

2) 前掲書、濱名（2004）を元に、藤田がまとめた定義である。藤田哲也『改増版 大学基礎講座』、北大路書房、2006年、211頁。

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

単位の取り方や時間割の組み方に悩む学生や、ポータルサイトの使い方やメールの書き方がわからない学生もいる。大学教員が学生に対し当たり前のように要求している能力と、実際に学生が持ち合わせている能力との間には、大きな乖離があるように思われる。アメリカでは1960年代～1970年代にかけて導入教育が開始され、日本でも1990年代後半にはこうした内容の授業が急増している<sup>3)</sup>。

本学、学習院大学においては、「アカデミック・スキルズ」という名の講義を論者が担当している。初年次のみならず、大学に入学してから学習面の困難にぶつかる学生は少なくないため、1年生から4年生まで受講可能な科目として開講されたが、内容としては「導入教育」に匹敵する。年々、受講者数は増加傾向にある。山田（2006）は「導入教育とは、高校から大学への学習面、生活面を含めての円滑な移行を目指すための教育であると定義できる。具体的には、（一）スタディ・スキル（一般的なレポート論文の書き方や文献の探し方、コンピュータ・リテラシー）の教育、（二）スチューデント・スキル（大学生に求められる一般常識や態度）の教育、そして、（三）専門教育への橋渡しとなるような基礎的知識・技能の教育、の三つの側面である」と定義している<sup>4)</sup>。山田に従えば、この「アカデミック・スキルズ」という授業は、スタディ・スキルを中心に、スチューデント・スキルにも触れる内容となっている。

本論文では、本学における「アカデミック・スキルズ」の授業実践から明らかとなることを提示しつつ、これからの導入教育に必要なことを検討する。また、大学という研究機関の意義についても触れるが、本論を通じ

---

3) 杉谷祐美子「大学管理職からみた初年次教育への期待と評価」『大学教育学会誌』、26、29-36、日本大学教育学会、2004年。杉谷によれば、私学高等教育研究所（日本私立大学協会附置）が2001年に行った全国の私立大学1170学部への学部長調査の結果から、1993年には実施件数が10学部だった初年次教育／導入教育の実施が、1999年には90学部以上に急増していることが明らかである。また、山田（2006）においても、学力が低下したとされる1999年を境に、急激に導入教育を実施する学部が増えたと述べられている。山田礼子「大学における導入教育の拡がりと言義」『大学と学生』、29、8-16、日本学生支援機構、2006年。https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000036765-00

4) 前掲書、山田（2006）、pp. 8-9.

て、哲学研究者としての論者の見解を示していく。

## 1. 「アカデミック・スキルズ」の概要

そもそも、「アカデミック・スキルズ」は2011年に大学図書館の提案により総合基礎科目として開講された授業である。翌2012年には、好評につき「アカデミック・スキルズ〈個別指導重視型〉」「アカデミック・スキルズ〈講義型〉」

1	イントロダクション
2	レポート（1）形式と体裁
3	レポート（2）ワードの使い方
4	資料の読み方
5	要約の仕方
6	情報リテラシー（1）大学図書館の役割と活用
7	情報リテラシー（2）インターネットの活用と情報モラル
8	学問上のコンプライアンスの重要性
9	論理学入門（1）
10	論理学入門（2）
11	論理的な文章の書き方
12	テキスト批評（1）
13	テキスト批評（2）
14	発表の仕方：パワーポイントの使い方
15	まとめ

表1 2018年「アカデミック・スキルズ」のシラバスより

の2科目に増強されたようだ。その後、2018年に基礎教養科目の開講科目として論者が引き継ぐことになる。授業内容は大学図書館主導のもとに開講されていた際のを、ほぼ踏襲した<sup>5)</sup>。主に、レポートの書き方、資料の探し方、論理的な文章の書き方、研究上の倫理などを指導する内容であった。講義科目とはいえ、内容に応じて演習形式も取り入れて授業を行っていた。1年生から4年生まで、どの学部学科の学生も受講することが可能な科目として開講された。レポートの書き方に関しては、表紙を付けること、ページ番号を入れること、引用は一行空けてインデントで字下げすることや、注の付け方、文献表の書き方などをレクチャーする。また、資料の探し方では、大学図書館の活用法やOPACの使い方、電子ジャーナルの探し方、オンラインデータベースの使い方などを指導する。その際

5) 2018年度のシラバス授業内容は表1を参照。

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

には大学図書館の職員の方に出張講義して頂き、有益な情報を教えて頂いた。論理的な文章の書き方については、文法的な誤りがないか、ねじれ文になっていないか、接続詞を上手に活用できているかなどを確認する。研究上の倫理については、情報モラルや研究モラルを考えた。したがって、本授業の到達目標としては①実際に図書館やインターネットを通じて適切な情報を手に入れられるようになる、②収集した情報を活用し、倫理的に適う再発信をすることが出来るようになる、③論理的な文章が書けるようになる、という3つを挙げている。

## 2. 導入教育の必要性

2018年時点での「アカデミック・スキルズ」の受講者数は62人であった。2019年は58人、2020年からは新型コロナの影響によりオンライン授業となったためか144人と増加した。Zoomでの授業は、思いのほか学生との距離を感じることなく、毎週元気に過ごしているかの確認から始まり、チャットで即時的にやり取りすることができるので、教室で質問を募るよりもスマートに講義を進められた。学生も参加者全員の前で質問したり発言したりすることには勇気がいるが、Zoomのチャット欄に聞きたいことを打ち込むのであればハードルが低く、沢山の質問が飛び交った。また、画面共有ができるので、WordやPowerPointの画面や検索画面を詳細に見ることができ、教室のスクリーンにPC画面を投影するよりもわかりやすかった。オンライン向きの授業であったのかもしれない。2021年も引き続きオンラインで201人、2022年もオンラインでさらに238人と受講者数は増加し、さすがに教員1人でZoomのチャット越しに238人分の質問に対応することは困難となり<sup>6)</sup>、2クラスに分けた。

---

6) 2021年の時点で、例えば、Wordの「参考資料」の機能を使って注を入れるデモンストラーションをした際には、その方法を1回では覚えられない学生、聞きそびれた学生、一瞬覚えたけれども忘れてしまい再度質問してくる学生などがおり、1回の授業で注の付け方を

そして、今年 2023 年、ようやく新型コロナの流行が下火となり、全面的に対面授業となったが、そうなるとむしろ、対面で大勢の学生相手に教員 1 人で対応できるか不安になった。そこで、今年度は実質人数制限を設け、85 人定員の PC 教室を使用して 2 クラス開講した。つまり、最大 170 人の受講者数である。また、教室でも手厚い指導ができるように、大学院生の TA を 2 人付けた。そして、人数が超過した際には、1 年生から優先に抽選で受講してもらうように配慮した。しかし、蓋を開けてみると、2 クラス合わせて約 400 人の希望者が教室に詰め寄せ、登録者数はポータルサイト上、一時的に 500 人を超えていた。2 年生以上には辞退をお願いし、1 年生の中からさらに抽選で受講者を決定した。したがって、今年度は 1 年生すべてを受け入れることはできなかった。

このように、「アカデミック・スキルズ」は年々受講者数が増加しているが、それはこの授業がいわゆる「ラク単」だからなのだろうか。おそらく、そうではない。というのも、本講義では、毎回リアクション・ペーパーや課題の提出が必要であり、決して楽な講義ではないからである。また、実際に、学生がレポートの書き方に苦勞していたり、課題にどう取り組んでいいのかわからず相談に来る場面も少なくない。

6 年間に渡って担当してきた「アカデミック・スキルズ」であるが、その間に学生からのニーズも変わっていった。というのも、学生からの相談として、「先生に質問をしたいけれど、どのように質問したらいいかわからない」「レポートに書きたいことがない」「そもそも大学で何をしたいのかわからない」「どうやって学習へのモチベーションを上げたらいいのかわからない」といった、今まで相談されなかったような内容を投げかけられることが多くなったからである。そこで、徐々にカリキュラムを変え、「教員に対するメールの書き方」「そもそも大学で学ぶ意味」「レポートや課題に取り組む意味」「モチベーションの上げ方」など、新たな内容を盛

---

5 回も 6 回もレクチャーした。よって、2021 年を上回る受講者数の学生に対し、1 つの授業で 1 人の教員が対応することには困難があると考えられた。

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

1	イントロダクション、まずはメールの書き方、先生への質問の仕方、ノートの取り方
2	そもそも、大学で学ぶ意味、レポートや課題に取り組む意味
3	レポートの書き方①体裁
4	レポートの書き方②体裁もう一度
5	レポートの書き方【復習回】－課題の答え合わせ
6	レポートの書き方③構成と内容
7	情報リテラシー①大学図書館の役割と活用、OPACやオンラインデータベースの使い方
8	情報リテラシー②資料の探し方と活用の仕方、情報モラル
9	実際、提出したレポートはどのように評価されるのか－教員が見るポイント
10	テーマの絞り方
11	問いの立て方－テキスト批評という方法
12	「要約」を活用する
13	わかりやすい文章を書くために①
14	わかりやすい文章を書くために②
15	まとめ

表2 2023年「アカデミック・スキルズ」のシラバスより

り込むようにした。こうして見ると、わずか6年ではあるが、確実に、学生のニーズは変化している。スタディ・スキルもさることながら、チューデント・スキルや、もしくはもっと根本的な部分に不安を抱え、それを解消したいと考えている学生が少なくないことがわかる。その原因には、大学を取り巻く状況の変化が大きくか

かわっていると考えられる。

### 3. 大学を取り巻く状況

受験戦争が激化していたとされる1990年、高校卒業後の4年制大学進学率は、24.6%だった（男子36.6%、女子15.2%）<sup>7)</sup>。論者が高校を卒業した1998年の進学率も36.4%（男子33.4%、女子27.5%）であった。ところが、2022年度の進学率は56.6%（男子59.7%、女子53.4%）である。2009年の時点で、進学率は50%を超えた。

別の角度から見てみよう。例えば、1990年の大学不合格率はなんと

7) 以下、進学率については、文部科学省「学校基本調査／年次統計 表番号4 総括表 進学率（昭和23年～）」の「大学（学部）への進学率（過年度高卒者等を含む）」の項目を参照。https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?stat\_infid=000031852304より

45.5% もあった<sup>8)</sup>。受験した人の半数近くが進学できないという恐ろしい時代である。また、論者が受験した 1998 年の不合格率は 25.6% である。ところが、2022 年の不合格率はわずか 1.7% だった<sup>9)</sup>。

そもそも、高校から大学への進学率が 6 割近くあり、かつ、不合格率が 1.7% という現状において、大学にこだわりを持たなければ、ほとんどの学生が進学できる時代である<sup>10)</sup>。これをもって大学を高等教育の機関と言えるのだろうか。大学はもはや特別な場所ではなくなったのかもしれない。まさに、大学の大衆化である。

かつては大学に入学することが困難であり、その競争に打ち勝って「大卒」という肩書を手に入れることには大きな意味があった。「大卒」という切り札は、その後の就職にも有利に使われたのだろうし、一流企業に就

---

8) 不合格率については、入学志願者数から進学者数を引いたもので算出。入学志願者数については、文部科学省「学校基本調査／初等中等教育機関・専修学校・各種学校 卒業後の状況調査 高等学校 全日制・定時制」の各年次の「卒業年次別大学（学部）・短期大学（本科）への入学志願者数」の大学（学部）の入学志願者数を使用。また、実際の入学者数については文部科学省科学技術・学術政策研究所「科学技術指標 2022」調査資料-318、2022 年 8 月を参照。1990 年の場合、大学入学志願者 887,518 人、入学者 492,340 人、差し引き 395,178 人（44.5%）という大きな割合で不合格者が出ていることになる。

9) 2022 年は大学入学志願者 646,214 人、入学者 635,156 人、差し引き 11,085 人（1.7%）の不合格者である。確かに、少子化によって大学入学志願者数自体は減っているものの、入学者数は増加傾向にある。大学数の増加も原因として挙げられる。1990 年には国公立私立合わせて 507 校だった大学数が、2022 年は 807 校に増加している。教育社会学者である舞田敏彦によるニュースウィーク日本版 2023 年 2 月 22 日の記事「受験地獄はもう遠い過去……時代は「大学全入」から「大学淘汰」へ」にも詳しい。<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2023/02/post-100921.php>（最終閲覧日：2023 年 10 月 9 日）

10) 大学入学共通テストの志願者データによると、2023 年の志願者数は 512,581 人、うち高等学校等卒業見込者（現役生）は 436,873 人、高等学校等卒業者（既卒者）は 71,642 人となっている。現役志願者が 85.2% と過去最高、浪人志願者は 14.8% になる。独立行政法人大学入試センター「令和 5 年度大学入学共通テストの志願者数等について」2022 年 12 月 6 日より。浪人生率は減少傾向にある。<https://www.dnc.ac.jp/news/albums/abm.php?d=209&f=abm00003256.pdf&n=%E5%88%A5%E6%B7%BB%E2%91%A0%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%95%E5%B9%B4%E5%BA%A6%E5%A4%A7%E5%AD%A6%E5%85%A5%E5%AD%A6%E5%85%B1%E9%80%9A%E3%83%86%E3%82%B9%E3%83%88%E3%81%AE%E5%BF%97%E9%A1%98%E8%80%85%E6%95%B0%E7%AD%89%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf> 大学にこだわらなければ、多くの学生が進学可能な時代であるが、国公立の芸術、工学、医学などの特殊な分野においては、依然として浪人生合格率がある程度の割合を占めていることも事実である。詳しくは、各大学の HP における入試統計資料を参照のこと。詳細については、紙幅の都合により割愛する。

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

職することが人生の安泰にも繋がった。ところが、現在は、大学にこだわりさえしなければ、どこかの大学に入れてしまう状態である。親世代と「大卒」の価値はまるで違うはずである。また、一流企業に就職することが人生の安泰を支えるかどうかも疑わしい。昨今では働き方も多様である。不況や新型コロナによる不安、ブラックな会社の実体などを目の当たりにすれば、名の知れた企業に就職することが幸せの条件ではないことは容易に想像できる。もし、その通過地点として大学進学を考えているのであれば、実に頼りない動機付けで大学に通うことになる。

2009年から大学進学率は50%を超えたものの、現在に至っても56.6%である。進学率はある意味頭打ちの状況である。少子化の中、大学設置数は増加しているにもかかわらず、大学全入時代は到来しない。こうした背景には、世相や家庭の経済状況の悪化があるだろうが、無理を押しつけてまで大学に行く必要はないと考える人たちも一定数いるということを象徴している。

昨今、大学に行きさえすれば明るい未来が待っているというわけではない。また、決して安くはない学費を払ってまで通うのであるから、その費用対効果も考えた方が良い。すると、当たり前ではあるが、大学で何を学んだか、どのような経験を積み、どのようなスキルを身に着けたのかという、学生個々人の経験や能力が問われることになる。他者目線ではなく、自分にとって有意義であり、自分にとって価値のある時間を過ごさなければ、大学にいる意味はない。

#### 4. メールから読み取る学生の「不安感」

「アカデミック・スキルズ」を引き継いだ2018年当初、年度初めに履修相談のメールがきても当惑することは少なかった。ところが、年々、ハンドルネームのみでメールを送ってくる学生、自分の所属が一切書かれていなく、どこの大学で何の授業を受講し、何の相談をしたいのか皆目内容が



わからないメールを送ってくる学生などが出てきた。そこで、「アカデミック・スキルズ」の初回では、教員にメールを送る際に盛り込むべき情報がどのようなものであるか指導するようになった。

なぜ、このようなメールが送られてくるようになったのか。一つには、SNSやLMSの発達が背景にあるだろう。自分の名前を書かなくても、メッセージをやり取りでき、スマホから簡単に打つことができる。だから、丁寧に書くべきメールであっても所属を書かずに送ってしまう。また、何でも教員に尋ねてくるケースも多い。例えば、授業の配布資料はポータルサイトのどこからダウンロードするのか、Wordの使い方、読みたい論文がネットで検索できない、などである。LMSの発達によって簡単に教員に尋ねることができるようになったのは良いことであるが、このような基礎的なことを教員に聞くのが果たして普通なのだろうか。

従来の考え方からすれば、まずは、同じ科目を履修している友人に聞けばよいだろうし、その方が本来ハードルも低いはずである。Wordの使い方はネット上に沢山ノウハウが掲載されているし、論文の検索の仕方も、親や友人、サークルや部活の先輩、図書館のレファレンスカウンターに聞けばよい。しかし、そのような考えに思い至らないのか、教員に直接尋ねてくる。時間があれば丁寧に対応できるものの、こうした質問が累積してくると、教員の負担はどんどん大きくなる。また、他の授業に関する質問をされることもしばしばである。本来、当該授業の担当教員もしくは同じ授業を受講している友人に聞く方が無難である。なぜ、他の授業の質問を「アカデミック・スキルズ」を担当している論者に尋ねてくるのだろうか。

「同じ学科や同じ科目を履修している友人を作ることは大切だ」「親や先輩や身近な人にも尋ねてみよう」「文献に限らず、一般的に情報をネットから上手く探し出そう」、こうした、論者にとっては至極当然に思われることがクリアできない学生も少なくない。その背後には、学生の抱える「不安感」があるのではないだろうか。自力で検索した情報が正しいのか不安になり、自分のやっている学習法が正しいのか不安になる。相談でき

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

る相手がいれば良いのだが、対人関係では受け入れてもらえるか不安に思い、声をかける勇気が出ない。それ以前に、コミュニケーション能力自体にも自信が持てない。聞きたいことがあっても尋ねられないし、尋ねられないから前へ進めないで困惑する。そこで、広く質問を受け付けている「アカデミック・スキルズ」で、簡単なことから他の科目の質問まで、何でも確認してみようということになる。

濱名（2006）によると、導入教育を必要とする移行期の学生が抱える悩みや不満において、「人間関係」と「授業への適応」が双璧をなしているという<sup>11)</sup>。高校時代の友達には会えず、寂しさを感じ、大学内では孤立していたり、新しい知り合いと上手く付き合っていく自信が無かったりと、学業以前にその土台となる部分へのケアが必要である。また、学業に関しては、新しい知識を得られる一方で、授業を難しく感じたり、退屈に感じたりする学生もいる。早い段階でこうした「不安感」を取り除き、学業に専念できるように導くことも導入教育においては重要である。

## 5. 何のために大学に来ているのか

「何のために課題をこなすのかわからない」「レポートで言いたいことがない」「何のために大学に来ているのかわからない」などの相談は年々増えている。そこで、2023年の「アカデミック・スキルズ」では、最初に「どのようにこの大学この学部を選んだのか」というアンケート調査を実施した（回答者153人）。その結果は表3である。「やりたい勉強ができる学部・学科だったから 42人」という前向きな理由がある一方で、次に多いのが「受かった大学・学部・学科の中で一番偏差値が高かったから36人」であることには注視する必要がある。また、「知名度がある大学だから 23人」も多い。「好きな教授がいたから、その教授の授業を受けて

---

11) 濱名（2006）, p. 40.

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

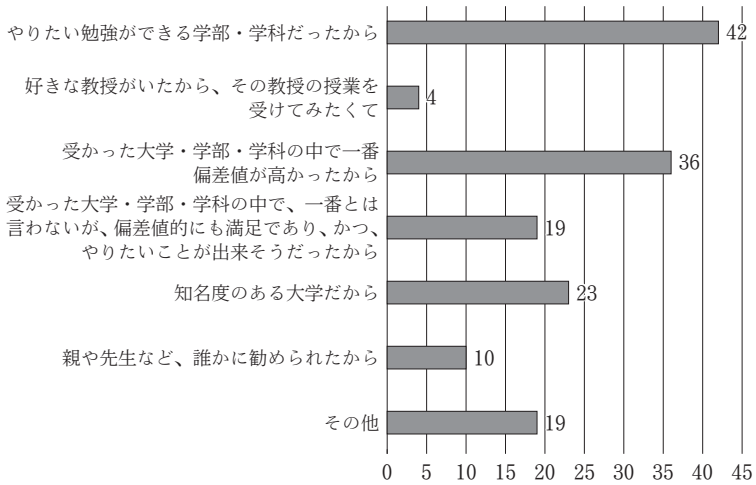


表3 アンケート「どのようにこの大学この学部を選んだのか」

みたくて 4人」が示している通り、ピンポイントにやりたい分野が決まっ  
ていて、具体的なビジョンを描いている学生は圧倒的に少ない。大学  
1年生は、当該の学部・学科に入学してみたものの、6割以上が具体的  
には何をやりたいかは決まっておらず、ただ漠然とやりたいことができるか  
もしれないという希望を持って入学しているというのが現状である。

さらに、追跡調査として、半期15回の授業終了後に、再度同様のアン  
ケート調査を行った（156人回答）。前回「その他」が多かったため、質  
問内容を少し変えた。その結果、「やりたい研究ができそうだ 32人」  
「やりたい研究ができると考えて選んだ 40人」と前向きな回答が合計72  
人と増えていた。3ヶ月間、実際に大学で学び、初期の動機付けにさえ変  
化が生じているようである。これは良い兆しである。ただし、ここでも、  
「偏差値で選んだからやりたい研究ができるかよくわからない 29人」  
「人のすすめで大学を選んだ 6人」「研究内容とは関係なく選んだ 33  
人」「その他 13人」などを合計すると81人となり、アンケート回答者  
全体の52%を占めることになる。半期を過ぎてもなお、研究や学習に

## 大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

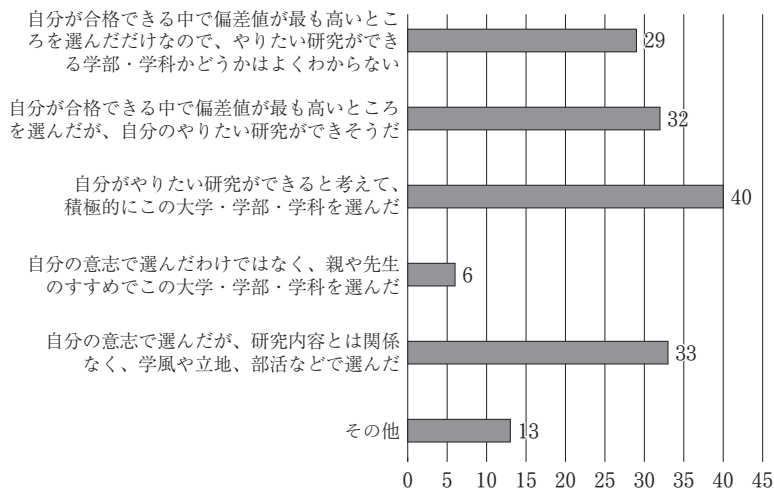


表4 追跡調査アンケート「どのようにこの大学この学部を選んだのか」

対して漠然としている者は少なくない。

半数以上が大学に進学する世の中において、大学進学は一般的な選択肢である。あるいは、社会に出る前の通過地点として当たり前前に大学進学するものだと考えているのかもしれない。このような場合、大学に入ってからかだか3ヶ月しか経っていないのであれば、自ら進んで関心のあるテーマを探し出し、前向きに学習せよと言われても難しいだろう。しかし、目的意識が乏しく、受け身の姿勢で授業に参加し、学習意欲が湧かないとすれば、先述の「不安感」もさらに増すことになるだろう。

## 6. 「アカデミック・スキルズ」に求められる内容

本講義の具体的目標の一つとして、最終的に「どの学部の学生も、前期末に課せられる教養科目のレポートをきちんとした体裁・構成・内容で書けるようになること」を目指していた。特に今年度は1年生のみの受講であったため、まずは前期のレポート課題を難なくクリアすることを掲げて

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

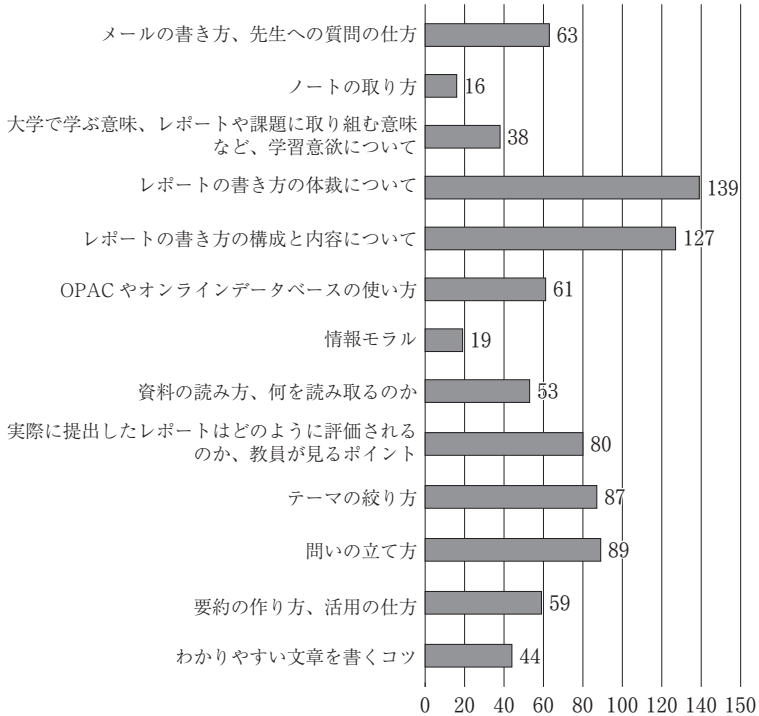


表5 アンケート「アカデミック・スキルの授業内容のうちで、あなたにとって役立つ内容はどれでしたか？（複数回答可）」

いた。アンケートでは、他にも「アカデミック・スキルの授業内容のうちで、あなたにとって役立つ内容はどれでしたか？（複数回答可）」という設問も設定したが、やはり圧倒的にレポートの体裁や構成、内容の整え方が有益であったようである。すでに学期末を待たずして、1学期のうちにレポートを課せられている実態に対処することは非常に重要である。周辺の問題としては、そもそもレポートの土台となる「テーマの絞り方」や「問いの立て方」へのニーズも高かった。また、「実際に教員が評価するポイント」がどのようなものであるか、おおよそ検討しながら書くことも重要である。書きたい内容を示すことはとても大切ではあるものの、そもそ

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

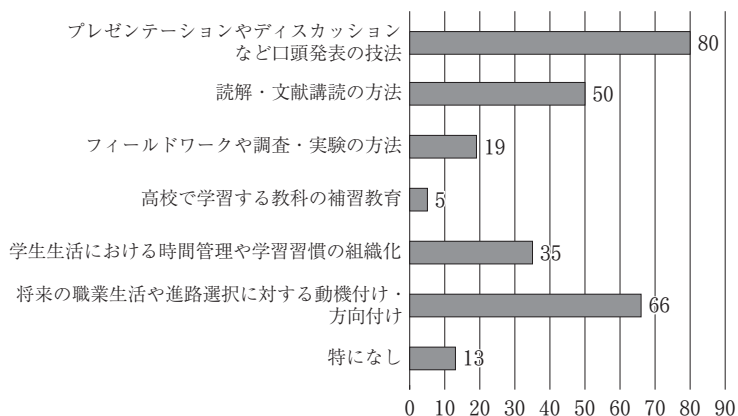


表6 アンケート「今年度の「アカデミック・スキルズ」の授業になかった内容で、こういう内容をやって欲しかった、というものがあれば選んでください。（複数回答可）」

も課題の趣旨を勘違いしていたり、授業内容に全く関係のない内容をいくら書いてもそれは評価の埒外になってしまう。リアクション・ペーパーを見ていると、そのような点に思いが至らなかったという学生も少なくなかった。

他方、「今年度の「アカデミック・スキルズ」の授業になかった内容で、こういう内容をやって欲しかった、というものがあれば選んでください。（複数回答可）」という設問も作った。昨年の意見として、もっと重点的にレポート作成に関連する部分にフォーカスした講義内容にして欲しいとの希望が多かったことや、スケジュールの関係、また、履修者が1年生に限定されておりゼミ発表などの機会が少ないという見込みから、今年度は口頭発表についてのスキルを割愛したが、やはり「口頭発表の技法」について、多くの学生が希望していることがわかった。また、「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向付け」についても多くの学生が不安に感じているという現実も明らかとなった。

情報モラル、ネット・リテラシー、ICTやAIの活用	37
コミュニケーション能力、プレゼン・ディスカッション能力	30
スタディ・スキル	24
（オンライン授業や、必修科目にすることで）より多くの学生に	22
学習意欲の高まる授業づくり（受動的な授業ではなくグループワーク、アクティ ブラーニング、課題解決型）	19
少人数制（学科別、能力別、手厚い指導）	14
キャリア教育（社会人としての心構え）	11
スチューデント・スキル	10
その他	10
グローバル教育	8
学習意欲や心構え	6
学際的交流（他者交流、多様性）	3
金融リテラシー、クレジットカード、アルコールハラスメント	3
心身の健康、初年度の不安を解消	3
社会構成員としての意義・政治参加を促す	3
高校までの学習の強化	3
どの講義を選ぶかの意義、履修相談	2
自大学志望の高校生へ向けてのイベント、入学前教育	2
講義の効果を測定し活かす	2

表7 学期末課題レポートのテーマ一覧

## 7. 課題レポートから見えてきたこと

学期末課題として、3000字程度のレポートを課した。「半期、「アカデミック・スキルズ」の講義を受けて、その経験を踏まえつつ、いくつかの資料に当たり「大学におけるこれからの導入教育（初年次教育、大学基礎講座、この「アカデミック・スキルズ」など）に必要なこと」について、自由に論じなさい」という趣旨のレポートである。すると、学生の主張として大きく分けていくつかの傾向が見えてきた<sup>12)</sup>。

---

12) 受講者数167人のうち、158本のレポートを回収。1つのレポートにつき扱っている内容も複数ある場合があり、かつ、テーマが不明瞭なレポートもあった。そのうえで、論者の主観によって分類したため、学術的な価値のある統計になっているわけではないが、概算とし

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

まず、一番多かったものが、「情報モラル、ネット・リテラシー、ICTやAIの活用（37本）」である。レポート作成に必要なPCスキルではなく、ネット上に溢れる情報の真価を見極める能力や情報モラル、AIと人間との能力の差別化を意識したAIの活用法を知りたいとする意見が多数寄せられた。ただし、前出の授業アンケートでは「情報モラル」が役立ったとする回答は少なかったので、今後、授業内容を改善する必要があるであろう。

次に多かったのが「コミュニケーション能力、プレゼン・ディスカッション能力の向上 30本」である。AO入試の割合が増えている昨今、プレゼンテーション能力を問われる場面をすでに経験している学生が少ないこともテーマに選ばれた要因の1つだろう。ただし、その背後には、根本的な、人としての能力や、社会に出た際に必要となる能力を身に付けたいとの考えがあるようである。AIとの差別化という意味で、人間にしかできないコミュニケーションを模索したいという意見もあった。

ようやく第3位に「スタディ・スキル 24本」関連が出てくる。「アカデミック・スキルズ」で中心的に扱っている内容である。レポートを書く能力、読解力、思考力、問題発見能力など、様々な能力の必要性が述べられていた。

また、「より多くの学生に 22本」では、導入教育の科目はオンラインにして人数制限を設けるべきではないという意見や、必修科目にすべきだという意見があった。というのも、導入教育を受講できた学生とそうでない学生とでは、1年生の時からスタディ・スキルに開きが生じてしまう可能性があり、この差によって学習意欲が低下したり、不安を抱えながら学習することになったりするからとの指摘があった。「学習意欲の高まる授業づくり（受動的な授業ではなくグループワーク、アクティブラーニング、課題解決型） 19本」も、ベーシック・スキルを学ぶための導入教育の授

---

て、表7のような割合でテーマ設定がなされていた。



業がそもそも退屈であると、内容を取りこぼしてしまうかもしれず、その結果、上記のような学習意欲の低下や不安感に繋がることのであった。

その他、「少人数制（学科別、能力別、手厚い指導）14本」にすべきだという指摘もあった。本来は学科別に専任教員が専門研究を見越した指導をすることが望ましいのかもしれない。専任教員が担当すれば履修相談もでき、学生の不安感を軽減できる。

また、「アカデミック・スキルズ」には直接関係はないが、「キャリア教育（社会人としての心構え）11本」を含めるべきだとする意見もあった。さらに「スチューデント・スキル10本」の必要性は、学生として持つべき常識やマナー、生活態度、時間管理などに焦点を当てたものが多かったものの、もっと根源的な、良好な人間関係の維持、心身の健康、人としての品格なども取り上げられていた<sup>13)</sup>。

本課題では、学生や教員、あるいは国や大学という組織の立場から、自由に論じてもらったため、幅広い見解が述べられていた。だが、総じて思われるのは、「スタディ・スキル」のみでなく、人としての基礎的な力や、将来社会に出た時に役に立つスキルを習得したいと考えている学生が多いということである。言ってしまうえば、研究上必要となる「アカデミックなスキル」よりも、実際に社会において必要となる人間としての能力を向上させたいと希望している学生が多いということである。また、初期段階で少しでも不安感を減らしたいと考えている学生も多かった。大学に入学し、新しいことに出会えるワクワク感や好奇心もさることながら、より円滑に不安なく学生生活を送りたいと考えている学生が多いということには注意を払う必要がある。「アカデミック・スキルズ」においても、「スタディ・スキル」のみならず、学習を下支えするような「スチューデント・スキ

---

13) アメリカではFirst Year Seminarとして、学生の精神的側面や生活面など、総合して大学生活をサポートする導入教育が実施されてきた。Cf. 山田（2006）。日本では、もともとスタディ・スキル中心の導入教育が実施されてきたが、おそらく、日本においても今後はアメリカに近い形で社会生活スキルの向上や円滑な人間関係の構築を含む内容をサポートする必要があるだろう。

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

ル」や、より根本的な人としての能力にも目を向け、学生の精神的側面や生活面などをサポートする必要があるだろう。

## 8. これからの導入教育に必要なこと

確かに、「アカデミックなスキル」以前に、それを下支えするスチューデント・スキルや人として社会において必要となるスキルの向上は大切である。ただし、あくまでもアカデミックな場としての大学において、こうしたスキルを学んでいるということの意味を考えなければならない。

どうやら学生たちは、コミュニケーション能力にせよ情報モラルにせよ、スチューデント・スキルにせよ、社会人になった時にも役に立つということを重視して、導入教育で学びたいと考えているようである。また、直接キャリア形成について導入教育で扱うべきだと主張しているものもあった。もちろん、「アカデミック・スキルズ」とは別にきちんと「キャリア・デザイン」という授業があるのだから、キャリア形成についてはこうした授業から学べばよい。しかし、「何のために大学に来ているのか」という問いに対して、ある種の「就職予備校」として大学に来ていると考えているのであれば、それは大いに問題である。

学生も数年後には何らかのテーマを研究することになる。その前段階として、課題レポートを提出したり、演習に取り組んだりしているのである。最終的に研究に結びつくところの、こうした日々の学習に対して目的意識が薄いのであれば、それは大学と学生との悲しいマッチングの結果にほかならない。

「アカデミック・スキルズ」のアンケート結果によれば、偏差値重視で大学を選んだことや、研究内容以外で大学を選んだことにより、漠たる気持ちで大学に通っている学生は少なくなかった。また、もし、仮に「大卒」という肩書を重視し、とりあえず大学に入ろうという気持ちで「就職予備校」のような位置づけで大学に入学したならば、就職の手前に存在す

る「学習」や「研究」に対して目的意識が薄いのも当然である。しかし、そのせいで、何のために大学に来ているのかわからなくなり、さらには「不安感」を募らせるという悪循環が起ってしまうなら、これを早期に解消する必要がある。

これからの導入教育にとって必要なことは、まず早期の段階で学生の抱える「不安感」を払拭することである。メールの書き方から始まり、コミュニケーション能力を磨く方法、円滑な人間関係を築く方法など、人としての根本的なスキルや社会において必要となるスキルを親身になって一緒に考えることが重要である。ただし、これらはいくまでも研究の基礎となるベーシック・スキルとして向上させようとしているということをおぼろげに忘れてはならない。学習や研究にとって障害や不安材料となるものを早期に取り除くことは重要である。同時に、本来、何かを研究することは、非常に楽しく有意義なことで、没頭できるような研究テーマに出会えることは、その後の人生にとっても大いにプラスになるということも、強調しておきたい。「何のために大学に来ているのか」という問いに対し、各自が前向きに回答できるような足場作りをサポートする必要があるだろう。

我々は、最終的に何か仕事を得て社会に参加し自立して生きていく。しかし、その時に自分の嫌いなことをするよりも、自分の好きなことを選べた方が幸せである。自分の向き不向きを知り、好きなことには全力を投げられるという経験を積むのに、大学という研究の場は最適である。

何か1つの関心事を突き詰めて調べ、研究し、論文にまとめ、唯一無二の自分の主張を完成させるという行為には、実直に仕事を遂行する粘り強さや、情報を探しまとめる能力、問題を発見し批判的に思考する力や、自力で問題を解決する力、それらを総合し発信する能力など、社会において必要なスキルが粗方詰まっている。また、人にもものを尋ねるスキルや、人間関係を円滑に保つスキル、タイムマネジメントやマナー全般も、研究室やゼミでの活動において必須であるし、これらは研究活動の一環として養える。研鑽を積む中で、こうした能力もまた磨かれるのである。半期の導

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

入教育で、これらすべての能力を習得することは不可能であるが、こうした能力が研究を通じて涵養されるということを伝えることは可能である。

例えば、いくら就職先が決まっても、所定の単位を修得し、学業を修めない限り就職はできない。では、なぜ単位が必要なのか。それは就職するためではない。学業を修めたという実績を示すためである。将来、AIに仕事を取って代わられないためにも、また他者に仕事を奪われないためにも、自分自身の強みを育てる必要があり、その修練の場として「大学」を選んだのであれば、学究を通じて自分の価値や能力を磨くのが全うである。そのように考えれば、たとえその先の就職に焦点が絞られていたとしても、大学での学びが自分にとって取りも直さず重要であることがわかるだろう。

導入教育の中でも、「アカデミック・スキルズ」のような授業では、大学という教育研究の場に所属する意味を伝えることは重要である。特に、哲学研究者である論者の立場からすれば、アカデミックなものの方を通して、広い視野や多様な考え方を持つことは重要であり、人生や生きる意味について客観的に俯瞰して見ることができるようになることには意味がある。換言すれば、将来への不安から手堅い就職を得ようと視野狭窄に陥ることを防ぐための多様なものの方の見方や批判的な思考力は、アカデミックな場を通じてこそ得られるのである。大学という場での学びは、こうした世俗からの圧を跳ねのけ、自由に思考し、可能性を広げることに他ならない。

今後、さらに少子化は進み、既存の価値観で世の中が進めば、進学率が下がることはないだろう。文部科学省によると、2040年度の全国大学進学率は59.6%（男子61.2%、女子57.9%）となり、大学入学者は2022年比で12万人減の51万人になると推計値を公表した<sup>14)</sup>。これは現状の大

---

14) 詳しくは、文部科学省による令和5年9月25日付の参考資料参照のこと。<https://www.mext.go.jp/kaigisiryoyou/content/000255573.pdf> また、令和5年7月14日に行われた大学分科会（第174）議事録にも認められる。2023年7月17日付の「大学ジャーナルオンラ

学定員の8割にしか相当しない。舞田（2023）の調査によれば、2040年には現在の難関校と呼ばれる大学に約4割の受験生が合格するとの試算である<sup>15)</sup>。少子化が進む中、大学全入時代が到来するかと思いきや、そうではなく、学力格差によって難関校に合格する学生とそうでない学生との二極化が進むことになる。難関大学に入ったからと言って、それすらもが4割である。目的意識が乏しい状態で大学に行くことにはあまり意味がない。肩書ではなく、実質、自分にどのような能力があるのか、自分には何ができるのかということが、未来の社会においては今以上に問われることになるだろう。研究を通して能力を磨くことの下支えとなるような導入教育を目指したいものである。

## おわりに

本論では、「アカデミック・スキルズ」の授業実践から明らかとなったことを提示した。アンケートやレポート課題からは、情報モラルやネット・リテラシー、ICTやAIの活用といった即時性のあるコンテンツと、コミュニケーション能力やプレゼン・ディスカッション能力のような対面スキルの向上を求めている学生が多いことが明らかとなった。しかし、これらの必要性は、大学卒業後の社会に出た時のことを見越してのニーズであった。もちろん、これらは、実際に生きていく上で必要となるスキルである。問題なのは、アカデミックな場を一足飛びにして「社会に出た時に必要となるスキル」を習得したいと考えている場合にある。

大学に入ってばかりで右も左もわからない中、さらに近い将来就職する

---

イン」における「2040年の大学入学者が定員の約8割に、文部科学省が推計」の記事にも詳しい。<https://univ-journal.jp/232997/>（最終閲覧日：2023年10月9日）

15) 前出、ニューズウィーク日本版2023年2月22日の記事によれば、2040年の段階で、国立・公立でない、いわゆる「MARCH」以上の大学に約4割の学生が進学できる試算となる。<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2023/02/post-100921.php>（最終閲覧日：2023年10月9日）

大学における「導入教育」のこれからに必要なこと（小川）

ことへの不安も相まって、社会で通用するスキルを早く獲得したいと焦る気持ちは理解できる。しかし、大学とはあくまでも教育研究の場である。どんな理由であれ、自分が身を置く場所として「大学」を選んだのであれば、学究を通して様々な能力を育むことが本来の近道である。そのためには、まず、大学で学ぶことの楽しさを知ることが重要であり、その障害や不安材料を少しでも減らす工夫が必要である。

論者が担当している授業は、あくまでも「アカデミック・スキルズ」と冠した授業である。したがって、今後も既存のスタディ・スキルを中心に講義していくことになるが、学生の不安感を少しでも払拭するためのチューデント・スキルについても積極的に取り入れていくつもりである。ただし、これらはすべて、アカデミックな場で求められるという条件付きである。その先に、たとえ一般社会において有用であるということが含意されていたとしても、である。

また、大学で学ぶことが、取りも直さず本人の個性や強みになるということ伝えるのも導入教育の役目である。大学で4年間を過ごす中で、真剣に向き合うことのできる研究対象を見つけ、それに没入していく経験は何物にも代えがたい。さらに、研究を通して、自ら何かに専念する力や、継続する力、自力で問題を解決したという自信など、人生を支える様々な力が涵養されるだろう。また、客観的に物事を捉える力も、アカデミックな場で養われる。特に、哲学研究者である論者としては、メタな観点から俯瞰して物事を捉えることの重要性を強く感じている。就職を考えたり、将来の生き方を考えたりする上でも、広い視野で物事を捉えることは重要である。導入教育はこうしたアカデミックな生活の入り口であり、当たり前ではあるが、学生をアカデミックな活動へと招き入れる意識のもとで授業を組み立てていくことが、今後の導入教育にとって大切なのではないかと考えている。